

■北海道大のランと東北大のパスの激突ーパインボウル2022の見どころ

全日本大学アメリカンフットボール選手権（甲子園ボウル）の1回戦を兼ねる第35回パインボウル2022が11月13日、ユアテックスタジアム仙台（仙台市泉区）で行われる。北海道学生連盟代表の北海道大（3年ぶり25度目）と東北学生連盟代表の東北大（11年連続32度目）の顔合わせ。両校は過去に22回対戦し、通算成績は北海道大の6勝15敗1分け。2007年の第22回大会で34-0と快勝して以降、残念ながら北海道大が7連敗中だが、攻守に戦力が充実する今年は15年ぶりの同ボウル勝利の期待も膨らむ。また、今年から全日本大学選手権が全国8学連代表によるトーナメントに衣替えした。パインボウルの勝者は同選手権2回戦（11月19日、名古屋・CSアセット港サッカー場）で、4強入りをかけて東海学連代表校と対戦する。両校のリーグ戦の戦いぶりを振り返り、パインボウルの見どころを探ってみよう。

北海道大は、6校のリーグ戦で争った第48回道学生選手権を5戦全勝で制覇。3年ぶり27度目の優勝を飾った。優勝決定戦となった北海学園大戦は、エースRB工藤輝一（4年、兵庫・白陵高）の3TDランなどで42-14と快勝した。総獲得距離281ヤードのうち7割の202ヤードがラン。リーグのベストイレブンに5人がそろって選ばれた強力攻撃ラインに支えられ、伝統の力が爆発した。パス攻撃は79ヤードにとどまったが、1年生から先発するQB茨木大輔（4年、兵庫・六甲学院高）が要所で確実に決め、攻撃に変化を付けた。キッキングゲームでもKRを兼ねるWR宮崎大地（3年、兵庫・星陵高）が75ヤードのキックオフリターンTDで試合の流れを引き寄せた。

北海学園大戦では守備陣も光った。最前列のDL川又浩世（4年、石川・金沢桜丘高）、DL浅井聡太（3年、東京・都立西高）が強烈な圧力で北海学園大QBにプレッシャーをかけ、DB陣も太田陽士（4年、埼玉・浦和高）が反撃の芽を絶つ値千金のインターセプトでパス攻撃を封じた。主将のLB坂田宙斗（4年、東京・都立小山台高）も確実にラン攻撃を抑え込んだ。

東北大は、第47回東北学生リーグのAブロックで3戦全勝。Bブロック首位の岩手大と対戦した優勝決定戦も31-7で快勝し、11年連続37度目の東北王者に輝いた。岩手大戦の総獲得距離333ヤードのうちパスで120ヤードを稼ぎ、4TDのうち3TDがパス。富沢風汰（4年、埼玉・大宮高）と芝山武志（4年、大阪・豊中高）の2人のQBを併用し、リーグ戦で好調だった富沢の調子が今ひとつだったものの、芝山がWR尾崎鉄平（1年、埼玉。浦

和高)へ2本、WR水出拓真(4年、群馬・前橋高)へ1本のTDパスを決めた。ラン攻撃ではエースのRB駒田健太(4年、埼玉・浦和高)が68ヤード、1TDと攻撃のリズムを築いた。守備陣では、LB関岡玲(4年、東京・国学院久我山高)、DB瀬戸温人(4年、石川・桜丘高)、DB石川航太郎(2年、愛知・明和高)が5本のインターセプトを決めて岩手大の追撃を封じた。

これまでは東北大に相性の悪かった北海道大だが、今年は6月の仙台グリーンボウルで対戦し、北海道大がRB工藤のキックオフリターンTDとWR本郷維規(4年、兵庫・市立西宮高)のTDキャッチで13-7と勝利している。苦手意識も返上したはず。関東、関西地区以外から夢の甲子園ボウル出場を目指す第一歩がパインボウル。ビッググリーンの戦いが楽しみだ。

なお、パインボウル2022はアメリカンフットボール専門チャンネルのRTVでライブ配信される。

(北海道学生アメリカンフットボール連盟広報委員 塚田博)